



TITLE:

日本變光星協會の提唱について

AUTHOR(S):

山本, 一清

CITATION:

山本, 一清. 日本變光星協會の提唱について. 天界 1931, 11(120): 211-215

ISSUE DATE:

1931-03-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161645>

RIGHT:

日本變光星協會の提唱について

山 本 一 清

古い歴史を持つ天文學に於いて、變光星の研究といふものは比較的新しい部門である。しかし、近年、殊に過去二三十年來、新しく發見される變光星の數は急激に増しつゝあるし、又、ひろく深く諸天體の理學的研究を進めるために變光星の觀測は非常に重大な意味のものであることが一般に知られて來た。従つて、年々増して行く變光星の、觀測の方面を徹底的に遂行するためには、學界の先輩たちが日夜苦心してゐるわけであるが、しかし、何と言つても毎年數百個づつ増加する新變光星の、恐ろしい數に押されて、比較的に少數の専門家の手だけでは何とも仕様が無い。それで、三四十年前から、獨逸や米國の學者の中には、ひろくアマチュア天文家の援助によつて此の大事業を達成せんと企て、其の結果、各國にアマチュアの變光星觀測者が増されたばかりでなく、今は米英佛等の諸國に、此の種のアマチュア觀測者たちの有力な團體が組織せられ、専門家も勿論此の團體の中に入り込んで、上下一致、美しい協力互助の實績を擧げてゐる。

我が國の天文家の中で、最も早く變光星觀測を始めたのは故一戸直藏博士であつて、既に 1905年の頃から、ボツボツ此の仕事に着手し、1908年頃までの間、珍らしく徹底的な努力によつて多くの變光星に關する觀測と、諸問題の究明に當られたが、不幸、故博士は間もなく天文界を去られ、更に惜しくも死去されたので、博士自身の觀測結果の整理さへも完成されるに至らなかつた。(此の整理は、博士の死後、神田茂理學士の手によつて漸次進められつゝある由。)

一戸氏の後、新しく變光星の問題を我が國で取り上げたのは、不肖此の自分である。自分は 1916年、水澤の緯度觀測所に於ける研究が一通り終つて、京都帝國大學へ歸ると間もなく、變光星の觀測と、多少の研究を始めた。丁度其の頃、京都大學に居られた上田百濟兩理學士も亦時々此の種の

觀測を行はれたことを覚えてゐる。又、1920年頃からは新進の鋭眼者中村要君が、やはり、變光星の觀測を始め、早くも一二の新變光星を發見されるといふ勢ひであつた。——— あだかも、此の頃、京都大學の新城教授は、理論的方面から、やはり、一般に變光星問題の研究をしてゐられた時であつたから、教授は、座談の時など、折々、自分等に、米國の A. A. V. S. O. のやうな變光星觀測者の協會のやうなものを日本でも作つたら好かうと、すゝめられた。しかし其の頃は、日本に於いて變光星問題に興味を持ち、其れを觀測してゐる者は、上記の人々に限られたやうな有様で、僅々五指を屈するに足らざる様であつたので、協會を作ることを暫く見合はせて、其の代り、自分は自ら米國ハーバード大學天文臺のキャンベル氏に書をよせて、A. A. V. S. O. に加入する手続きを取つた。米國でも之れを非常に喜んで、日本からの自分の参加を歓迎してくれ、會費は免除して迎えてくれた。其れ以來、今日に至るも、自分は A. A. V. S. O. 會員ではあるが、會費は要らないといふ特權を與へられてゐる。のみならず、ハーバード大學からは、ブレテンやら、サイキュラーやら、其の他の諸種の出版物を惜し氣も無く自分にあて送つてくれてゐる。又、實際、急激な變動をする不規則變光星の觀測などのために、國際的見地から、自分等の觀測結果が如何に喜ばれたかといふ實例は、「天界」 第一卷 第18號の第111頁にも載せられてある。

1923—4年頃から、日本では、京都以外の土地でも變光星を觀測する人が少しく増した。長野縣の二三氏や、東京の神田茂氏等がハーバードへ觀測結果を送られるやうになつたのも此の頃である。自分は1923年末から約一ヶ年米國ハーバード大學に滞在研究中、日本からやつて來る此等の報告を見て大に喜んだものである。(「天界」第44號第325頁を見られよ!!)

自分は1925年の春に歸朝した、それから、やはり變光星は決して忘れられない研究題目の一つであつて、(自分が滞米中の可なりな日數をハーバードに暮したのは全く變光星研究のためであつて、此の滞在中、總計6個

の變光星の光度曲線を研究し、又、シャプレイ 臺長のすゝめにより、大小マゼラン兩星雲中にある約百個の變光星の光度測定をやつた。)暇があれば觀測を今も尙ほ續けてやつてゐる。

花山の中村要君も、上に述べた通り、變光星については一通り以上の専門家であつて、絶えず、氏一流の獨自的な態度によつて、いろいろ觀測方法の研究と共に、觀測も決して怠らず、熱心にやつてゐられる。

百濟助教授も、以前からの變光星ファンたることに變りなく、今も 尙ほ煤煙の大阪の市中で、やはり或る種の星の光度を觀測してゐられる。

其の他、渡邊、稻葉、村上、小山諸君は、皆何れも 自分等が直接間接に變光星の觀測をすゝめ、其の結果を 擧げてゐられる人々である。

長野縣には不思議にも變光星觀測者が多い。諏訪に 一團の熱心家が居られるのは、皆、畏友三澤勝衛氏の インフレンスによるものであること言ふまでも無いが、其の他、北信地方にも 熱心家が少なくない。しかし、最近年は、嘗に 長野縣のみならず、關東にも、關西にも、かくれたる熱心家がボツボツ起つて來た。幾年か 前からは天文月報上にも、神田氏等の斡旋によつて變光星觀測欄が設けられ、時々、諸方の觀測結果が表になつて載せられる時代になつて來た。其の間に、神田氏自身は、觀測のみならず、いろいろ理論的方面にも研究を進められ、見事な論文が時々現はれるやうにもなつた。

時代は、十年前と比べて、大きく變つて來た。長野縣には 我が花山天文臺の出張所が水内郡に設けられ、金森君は我が京都帝國大學の囑託として、昨秋以來専ら變光星の觀測に當られることになつた。岡谷の 古畑君は昨年 から二度も花山へ來られ、エロスの變光の 發見や觀測で花々しく活躍せられるばかりでなく、同君も亦、今春來、京都帝大の 囑託となつて、變光星の觀測に當られることになつた。

又、圖らずも、先月、我が倉敷天文臺には、荒木健兒氏が 臺員として入所せられると共に、特に變光星の觀測方面に努力せられる 意氣込みを示さ

れる。

こゝに於いて、1916年以來の 新城博士の提案であり、又、我々の希望である協會設立の事を具體化する時機が愈々到來したことを、自分のみならず、誰でも皆一様に、感ぜざるを得ないと思ふ。

昨年(1915)の秋、自分が長野縣へ出張した時、彼地の 熱心な變光星觀測者たちの立場を見て、一應、「長野縣變光星協會」といつたやうなものを設立されるが良からうと、すゝめたことがある。このすゝめは、彼地の 人々に可なりの興味を牽いたらしい。其の後、古畑君や金森君が花山へ 來られる度毎に、此の種の協會の設立についての意見が 幾度となく交換せられた。其の結果、も早や、長野縣一縣の會とはせず、序での事に、全國的なものとする目的で、「取り敢へず、全國の同志十數氏へ、檄を飛ばし、先づ自分等二三人の簡單な思ひ付きと計畫を假りに主題として、」ひろく意見を募ることとした。其の全文は下の通り。

拜 啓

日本に於ける變光星觀測は日本天文學會及天文同好會 觀測部の事業として近年異常な進展を致しまして、諸外國と比肩し得る様になりました事は誠に學界の爲め喜びにたへない次第であります。尙 又實際の觀測に従事される方も急激に増加致しまして現在では 既に冊名にも達して居る様な有様であります。然るに觀測者は日本天文學會又は 天文同好會の會員として、個々に觀測を行つて居るのみでありまして、觀測者相互間に 密接な連絡がとれて居ない事は此種の研究上 甚だ遺憾に思ふのでありまして、何とかして、全日本の觀測者が協同して、計畫的に 觀測を行ひ、諸外國に劣らぬ様に益々其實をあげたいと思ふ次第であります。

今迄觀測者の或人々が、時々此の様な 考へに基いて、地方的に變光星觀測者會なるものを作り、天文學會及び天文同好會の援助を受けて、有益な觀測を行ひたいと思つた事もありましたが、實現の運びに至らず、更に色々相談を進めて行きました所、現今の狀勢から推して、之を 全國的なもの

とすべく、思ひたつたのであります。

それで今度發起者として右の次第を申上げ、全國の觀測者諸賢の御賛成を得たく存すると共に、會の創立についての諸賢の御意見、御希望を承り度いと思ふ次第であります。

左に私共の思ひついた儘の要旨を記します。

1. 會 合 年に二回程(春及秋)東京、京都又は他の地方に開いて、親睦相談等をなす。
2. 委 員 會長、幹事、委員、會計等を定めて、會の事務を行ふ。
3. 會 費 印刷物、通信費等に關する實費を、年に若干徴集する。
4. 報告及機關紙 報告は毎月末或は隔月位に 適宜發表し、機關紙は獨立に發行するか又は當分の間、天界、天文月報等に依頼する。
5. 事 業 星圖……觀測者の便宜を計り、個々の 變光星の星圖を作製配布する。

機械……購入法を斡旋し又設計の相談にあづかり、又機械を貸與し又破損の修理等に關する便宜を計る事。

編輯……觀測結果の整理、變光星學界の動勢、海外の論文紹介等の事をなす。

講習……變光星觀測法 其他について、觀測者の爲め(毎年夏季適宜に開く事。

(右は何れも掛を設けて事務を行ふ)

大體以上の通りであります、至急諸賢の具體的の御意見を 承り度く、切に願ひ申上げる次第であります。 啓 具

二月九日 山 本 一 清 金 森 丁 壽 古 畑 正 秋

此の檄に對する諸方からの返答は、意外に大きい反響を以つて、二月末日までに、各地から續々と到來しつゝある。此等の手紙を見て、愈々次ぎの手段に出るため、とにかく花山では三四人の人々と實際上の下相談をすゝめる事にしたが、近いうちに、正式の設立發起人を定め、改めて全國に廣く變光星觀測者の協會へ加入をすゝめることにしたい。此の意味に於いて、1931年が永く紀念すべき年となることを祈つて止まない。(1931年3月2日 山本)